カリオカの風

リオデジャネイロ日本人学校通信

１２月号

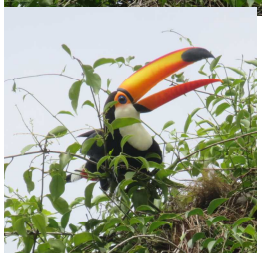
令和５年１２月　１日

校長　小堺 広司

学校教育目標
「自他の生命と人権を尊重し、ねばり強くたくましい心豊かな児童生徒を育成する」
～世界の架け橋となる子どもたちの育成を願って～

人と人との響き合いが生まれるリオ日学 ～自分らしさが見えてくる～

「先生、トゥッカーノがいます！」



理科の観察で駐車場にいたところ、子どもが木の上にトゥッカーノを見つけました。リオで人気の鳥ですが、なかなか出会うことがないだけに、しばらく観察していると小鳥の巣を襲っているようです。

「あっちへ行け！」。トゥッカーノよりも小鳥を守る正義感が勝ります。みんなの願いが通じたのか、トゥッカーノは飛び去って行きました。

子どもたちの思いがこだまするリオ日学の日常は素晴らしいです。人と人との響き合いが生まれる環境を大切にしてまいります。

＜全校集会（校長）より　１１月２１日＞

宮澤賢治の童話を読んだことはありますか。「銀河鉄道の夜」「注文の多い料理屋」「風の又三郎」など有名です。

今日は「セロ弾きのゴーシュ」を読みます。

あらすじ＝ゴーシュはセロ（チェロ）の奏者。楽団中一番下手で、１０日後の音楽会までに練習しなければならないのに、夜になると次々と動物たちが現れて邪魔をする。仕方なく相手をしているうちに、とうとう音楽会の日になってしまう。てっきり楽長に叱られると思ったら、意外に賞賛を受ける。動物たちとの交流が自然とセロの練習になり、上手になっていた。

ゴーシュになりたいという人がいます。みなさんはどう思いますか。絵本作家の舟崎さんは、「勉強もできず、学校で何とかうまくやろうと思っても、人から認めてもらえない」時期を過ごしました。物語を読んで、「世の中に受け入れられなくても、不満をぶつけ、文句を言いながらも一人前になっていく」ことができたらどんなに良いだろうと、ゴーシュの生き方に共感し憧れたそうです。

日本人医師・中村哲さんはアフガニスタンで現地を助ける組織「ペシャワール会」を立ち上げ、水路を掘り、砂漠を緑色に変え、衛生環境を整え、６５万人の命を救ったと言われます。

若い頃、中村さんは仕事より好きな昆虫観察や登山をしたいと思っていました。でも、研修でアフガニスタンへ行って様々な困難に直面し、自分が去った後病気や貧困にあえぐ人々はどうなるかと考えると帰国することができなかったそうです。その時「どこに居ても思い通りに運ぶ人生はない」ことに気づき、ゴーシュの生き方＝人として最低限守るべきものを大切にして「天から人への問いかけ」として与えられた時間を生きていることが自分の人生そのものの姿と重なったそうです。

人のために尽くすことは、自分の名誉や損得のためではありません。中村さんはアフガニスタンで、日本人が忘れかけていることに気づきました。それは、「アフガニスタン人にとって、人間の存在は人や神のためにある。自分が自分がという意識は小さい。一方、現代の日本人はあたかも一人で生きているかのようだ。**人間は、本来、人と人との響きあいの中で、実体のない自分（＝自我）という存在が、存在になるものだ。**」ということです。

家族と暮らしていると親や兄弟がいる。学校に来ると仲間や教師がいる。うれしいことも、悲しいことも、相手との響きあいがあるから感情が生まれる。「自分って、何だろう？」と鏡に問いかける時、実体のない自分の存在が不安になる。でも、家に帰れば家族と、学校に来れば仲間や先生方と、自分の存在をその響きあいによって理解することができます。

宮澤賢治は結核で３７歳の若さで亡くなってしまいます。その２年前、体調の不安を抱えながら詠んだ詩があります。

「雨ニモ負ケズ、風ニモ負ケズ、雪ニモ夏ノ暑サニモ負ケヌ・・・寒サノ夏ハオロオロ歩キ、日照リノ時ハ涙ヲ流シ、ミンナニデクノボートヨバレ、ホメラレモセズ、クニモサレズ、サウイウモノニ、ワタシハナリタイ」

彼は人が見ていようがいまいが、相手を思いやる生き方を貫きたいと望みました。この思いがあったからこそ、彼の物語に流れる優しさに私たちは心を打たれるのでしょうね。みなさん自身、思い悩むことがあるかもしれませんが、物語から学ぶこともあります。

リオデジャネイロ日本人学校の「響きあい」を楽しみに、人の優しさにたくさん触れ、自分らしく過ごしましょう。

○ 世界に羽ばたく先輩に学ぶ！

１１月１３日（月）、現在三井物産に勤務し、リオで研修中の彦坂祐輔さんが、進路のお話に来てくださいました。

１５年前、南アフリカ共和国ヨハネスブルク日本人学校で３年間中学校生活を過ごし、帰国後、高校～大学と学び現在に至る中で、日本人学校からの進路選択と学校生活にどんな意義があったかが話のテーマです。

まず、今の仕事の原点は「日本人として海外で活躍したい、海外の発展に貢献したい」という思いであり、日本人学校で学んだ日々がそのベースにあります。治安が悪く、コンパウンドという塀に囲まれた住居で暮らす中、部活もない、友だちの輪も広がらない（中３の在籍１名）、常に親との距離が近い（父は日学の教師）、プライベートもない中で、自分のできることの中から前を向き、その自分と向き合う大切な経験ができたと言います。この状況は一生続くわけではない、自分の使える時間はたっぷりある、異文化で生き抜く力を身に着けるチャンスと思って、日々の出会いを大切にして、自分で進路の準備をしました。受験も帰国子女枠は使わず（条件が年度や学校によって違うため）、「こうなりたい・どんな夢も叶う」「勉強はやりたいことの可能性を広げ、自分を救ってくれるもの」「いつかこの経験が生きる」と信じて努力を積み重ねたそうです。

リオ日学の子どもたちからの質問で、「将来何をやりたいか考え始めたのはいつ頃ですか？」に対して「当時は考えなどなかったけれど、高校で部活はどうするなどをきっかけに考え始め、大学の時もいろいろ考えた」という回答でした。中学生に「あなたの夢は？勉強しないと将来困る」などと大人が質問をしますが、模索するのが中学生であり、明確な答えなどは無くてもしょうがないのです。彦坂さんはそのことを教えてくれました。最後の質問「日学３年間で一番身に着けた力は？」に対して**「どんな状況でも前を向く（楽しむ）力」**と話されました。今日学んだことを私たちの生活に生かして、小さな一歩を踏み出したいですね。

○ 全校集会（ロンドン編）から

１１月２１日（火）、現在イギリス・ロンドンで仕事をする校長の娘（碧さん）が休暇を利用してリオを訪問しました。リオ日学では学校昼食会に参加し（みんなにロンドン土産の試食！）、午後の授業でロンドンクイズのアシスタントとして国際理解の話をしました。１０問の三択クイズに答える内容は、アニメやキャラクターの話から名所の話へとだんだん難しくなっていきました。中でも、ウエストミンスター寺院の鐘の音と日本の学校のチャイムは、「チコちゃんに叱られる」でも取り上げられた難問だったり、グリニッジ天文台にある本初子午線から時差を答える問題は、リオのプラネタリウムにある資料がヒントで中学生には社会で習ったことなのでプレッシャーのかかる問題でした。エリザベス女王（マラカナンスタジアムにもやってきた）を称えるパディントンベアの映像はイギリスの栄光を象徴するものでした！
（お土産のパディントンベアのシールを使ってね）

○ AED が配備されました！

１１月１３日（月）、学校予算と国の補助でAEDを購入しました。

AEDは命を救う大切な機器で、学校に配備が求められています。

また小学校高学年から中学生までは保健の授業でAEDの使い方について学習することが盛り込まれています。

今回、ブラジル日本光電サンパウロから、ロベルト・アベさんという日系３世の方が、子どもたちに授業を、放課後は教員にAEDの研修をしてくださいました。

ロベルトさんは小学６年生まで日本で生活し、その後ブラジルに戻って現在に至り、仕事の傍らで日本とブラジルの狭間にいる子どもたちのボランティア活動をされているそうです。熱心なご指導に感謝するとともに、ロベルトさんの活動に何かお手伝いができるかもしれませんね。

○ 体験的な学びが実を結ぶ

書写で書初めをしました。もう日本の季節は真冬となり、年の瀬を迎えます。中学部・技家は木工加工をしています。限られた材料と工具でデザインしたものを形にしています。ペガーボール（障害者スポーツから生まれた）を朝トレで楽しみました。

体験的な学びから豊かな心が育ちます。

＜時の流れに身を任せていたら～成長を感じる時＞

３０年前、サウジアラビア王国ジッダ日本人学校勤務時に娘が生まれました。エジプト人医師とフィリピン人看護師に取り上げてもらいました。旅行でロンドンを訪れた時、グリニッジ天文台の本初子午線をまたぎ、娘を抱っこして撮った写真が昨日のことのようです。。

今年７月は、私抜きで妻と妹たちをロンドンに招き、アフタヌーンティーやハリーポッターの聖地巡礼を楽しんでいました。送られた画像を見るとみんな笑顔です。

リオで、久しぶり会って６日間を共に過ごし、別れ際、危ないことをするな・体に無理をするなと娘に諭されました。老いては何とやら…。時の流れは早いものです。